



(左から)半田栄子さん、成岡桂子さん、大村貴美さん

ちだけでは不足している知識を補うこともできません。

身体を使い、自分たちで考え、実践に活かしていく。この一連のプロセスをとおして、「わかった」「できた」という喜びが得られると、介護職にとって大きな充実感となります。そうすると、「職員

2

「口から食べる」を支援することで、介護職も成長する

——特別養護老人ホーム丸子の里(静岡県静岡市)

経管栄養の利用者が入居して

Ⅱ章3でも取り上げたように、人にとって口から食べることは大きな喜びであり、生きるエネルギーにもなります。丸子の里では、たとえ経管栄養でも口から食べられる可能性がある人の場合、その思いの実現に向けて取り組めます。

2年前に丸子の里に入居した利用者もその一人であり、それまで4年間ずっと経管栄養が行われてきた人です。表情が乏しく、声かけにも反応がなく、発語することもない状態で、自分でチューブを抜いてしまうこともしばしばありました。

しかし、囁託医(耳鼻咽喉科

の顔つきや仕事ぶりも変わっていきますね(渡辺さん)。

根拠を知るのは、ケアの力を高めるための第一歩。みずほ苑では勉強会の場をうまく活用しながら、「なぜ」を考える力を磨いているのです。

段階を踏んで経口摂取へ

そのためには利用者との間に信頼関係が不可欠です。そこで、根拠強く声かけをしたり、コミュニケーションのとり方を工夫するなど、まず利用者との関係をつくることから始めました。さらに生活の活性化を図って、食べることへの意識を高めることに。また、離床したり口を開けてもらうなど、日々のかかわり

医)の診察で嚥下機能が残っていることがわかりました。実際に、

給を口にあててみると、かすかに口を動かす反応も見られたため、経口摂取に向けた取り組みを行うことになったのです。

段階を踏んで経口摂取へ

そのためには利用者との間に信頼関係が不可欠です。そこで、根拠強く声かけをしたり、コミュニケーションのとり方を工夫するなど、まず利用者との関係をつくることから始めました。さらに生活の活性化を図って、食べることへの意識を高めることに。また、離床したり口を開けてもらうなど、日々のかかわり

の中で、食べるために必要な動作がどれだけできるのかを観察し、看護師や栄養士とも連携をとりながら、介護職としてできることを行っていたのです。

経口摂取の第一歩はゼリーから。ベッド上でギヤッジアップして飲み込みやすい姿勢をつくります。そして、次の段階はミキサー食。カロリー量にも配慮しながら、徐々にミキサー食の回数を増やしていきました。「口から食べてもらうということには緊張感もありました。ですから、看護師も協力し、小さいものから徐々に大きなものへと変えていきました」と介護長の半田栄子さんが言うように、あくまでも慎重に、そして家族にも了解を得た上で行われました。そして、ミキサー食は大丈夫と判断されると、きざみ食に変更。現在もきざみ食は継続されています。「今では自力摂取となっています。気づいたら隣の人のものも食べてしまうほどです(笑)」(半田さん)。

介護職の意識

「介護職の思いがなければ、

ずっと経管栄養のままだったかもしれない」。現在は同一法人の静岡市駿河区長田地域包括支援センターに在籍する大村貴美さんはそう語ります。「たしかに経管栄養のほうが楽ではあります。しかし、日々利用者とかかわる介護職としては「口から食べてもらいたい」という思いもっています。元気がなくなっていく姿をみることは、介護職にとっての喜びですね」。

もちろん、「介護職の思いだけではだめ」と大村さん。「なぜそうするのか」「どうしたらうまくいくのか」を考え、しっかりとアセスメントすることが不可欠といえるでしょう。

こうした取り組みにより、「一人ひとりの職員の力が伸びた」と施設長の成岡桂子さんは言います。「言われたからやるのではなく、自分自身で考え行動できる職員はとても頼もしいものです」。

ケアの意味を知り、確固たる思いをもった介護職の存在は、利用者にとって大きな力となるでしょう。